—特集 (神経内分泌学の基礎と臨床—最近の話題—)—

公開シンポジウム「神経内分泌学の基礎と臨床：最近の話題」

若林 一二¹⁾・佐久間康夫²⁾

¹⁾日本医科大学内科学第 3 教室

²⁾日本医科大学生理学第 1 教室

Recent advances in neuroendocrine research

Ichiji Wakabayashi¹⁾, Yasuo Sakuma²⁾

¹⁾Department of Medicine III, Nippon Medical School

²⁾Department of Physiology, Nippon Medical School

向下垂体作用を持つ視床下部の神経ペプチドの同定を軸に発展してきた神経内分泌学は、今日新たな発展段階を迎えている。これまでに多くの神経ペプチドが同定され、その構造が解明された。現在の主要な課題はこれらの物質の産生が脳内神経回路により、あるいは遺伝子レベルでどのように調節されているか、またどのような機序により作用が発揮されているかを受容体や細胞内情報伝達系のレベルで解明する点にある。もとより、神経ペプチドの標的組織も下垂体前葉細胞に限られず、高次脳機能の調節や全身のホメオスタシス、成長や性成熟などへ関与が明らかになってきている。神経ペプチド産生ニューロンの個体発生の研究は、脳細胞が脳室周囲組織から発生するという従来の常識を覆し、脳の形成機序に新たな視点を提供するとともに、これまで原因の不明だった病態に共通の分子レベルでの異常を明らかにした。また、神経ペプチドには免疫担当細胞に発現し、いわゆる神経免疫相関への関与が想定されているものもあり、気分と免疫機能の関連といった現象の理解につながる可能性も否定で

きない。

このような状況のもとで神経内分泌学の研究の発展に一層寄与することを目指し、現在本学では、私学振興財団学術研究振興資金の助成により「神経ペプチドの生理作用に関する新たな概念の確立」と題する共同研究が進行している。本シンポジウムではこの共同研究の現況の報告のみならず、下垂体機能の調節という境界から飛び出して、新たな領域に乗り出した神経内分泌学の現状と未来について学外の第一人者をお招きし、最新のトピックスを紹介していただいた。遺伝子から形態形成まで、フィードバック調節から開口分泌、イオンチャネルまで、正常と病態双方の切り口からのアプローチは、基礎臨床を問わず参加者の得たところが大きかったと思う。興味深い話題を提供していただいたシンポジストの先生方、活発な質疑により会を盛り多いものにしてくださったフロアの先生方双方にあらためて御礼申し上げる。

(受付：1998 年 8 月 6 日)

(受理：1998 年 8 月 8 日)